

生田緑地のコタニワタリについて

吉田 三夫*

On the *Asplenium scolopendrium* L. in Ikuta-Ryokuti Park, Kawasaki City

Mituo YOSHIDA

神奈川県ではかなり稀なシダ植物であるコタニワタリが生田緑地に生育していることが確認されているので、ここに簡単に報告しておきたい。

神奈川県レッドデータ生物調査報告書の絶滅危惧種(En) D 101種に収められており「このランクのものはもともと神奈川県では稀なものがかろうじて生き残っているものである。」とあり、また「神奈川県では三浦半島の田浦温泉谷戸、奥湯河原などに記録が見られる程度で、かなり稀である。」とある。

本種の発見は梶山三千男氏とかわさき自然調査団のボランティアの方々である。最終的な同定は東京農業大学の宮本太先生が行っている。

本種は北海道、本州、四国、九州に分布し、日本海側にやや偏る傾向がある。樹林下や岩上に生える温帯性の常緑多年生草本。根茎は太く斜上し、50cm前後の全縁の葉を束生し、淡褐色の披針形の鱗片を密につける。葉身の基部は心形でくびれ、側面は耳状に発達することがある。ソーラスは中軸と縁との中間に、小脈上に向き合って平行して長く並び、包膜は向かい合って開く。

生田緑地の植物的な特徴の1つに、公園という関係上植栽植物が多いということが上げられる。本来的にはクスギ・コナラ林が大半を占め、ヒノキ植林、シラカシ林モウソウチク林などが多少見られる程度であるが、林縁などは人工的、造園的な面が強い場所である。神奈川県ではほとんど生育していない種子植物のナツフジがあたかも自生しているように生えている。土などに種子が混入したものが入ってきて成長したようだ。

本種の生育地は2次林の林縁が石垣になっていて、その石垣の隙間である。人工的な場所であるが1株だけであり、廻りの様子から見て植えられた物ではない。生育状況は良くなく、いずれは枯れてしまうように思える。

同様に人工的な別の場所に絶滅危惧種であるシダ植物オニヒカゲワラビ (*Diplazium nipponicum* Tagawa) が生育しているが、これについては神奈川県植物誌調査会員・宮崎卓氏・他氏が報告しているので、ここでは写真だけに止めたい。

末尾であるが、情報を頂いたかわさき自然調査団のシダ班ボランティアの方々に深く感謝の意を表したい。

引用文献

神奈川県レッドデータ生物調査団編(1995)神奈川県レッドデータ生物調査報告書; 42pp, 45pp.
神奈川県立生命の星・地球博物館



コタニワタリ



オニヒカゲワラビ

* 川崎市青少年科学館

追 報

ヒナキキョウソウ

Spicularia biflora (R. et P.) Fisch. et Mey.

神奈川県植物誌(1988)では、県内で2ヵ所でしか確認されていない種子植物・帰化植物であるヒナキキョウソウが、初めて川崎市でも確認されたのでここに簡単に報告しておきたい。

採集日は1995, 5, 28日。採集地は川崎市多摩区中野島に接する多摩川の河川敷。採集者はかわさき自然調査団員・神奈川県植物誌調査会員の吉田多美江氏。同定者は神奈川県植物誌調査会員でキキョウ科を担当している支倉千賀子氏である。

県内での帰化は1988年当時まれであったが、今度発行されることになっている神奈川県植物誌では、どのような分布状況になっているか興味のあるところである。



ヒナキキョウソウ